HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	故徳淵永治郎氏略傳
Author(s)	高橋, 義直
Citation	札幌博物学会会報, 5(2), 133-137
Issue Date	1914-06-13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60879
Type	journal article
File Information	Vol.5No.2_008.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

故德淵永治郎氏略傳

(A Brief Biography of the Late Y. Tokubuchi.)

故德淵永次郎氏は元治元年十二月十三日渡島國函館に生る。 父は長崎の人德淵八百吉、賣藥行商を業として函館に來り、同地にて妻を娶り四男を擧ぐ〻氏は其長なり。 明治五年擧家日高國幌泉郡庶野村に移住し海藻採集業に從事す。 同七年四月母故ありて、三男及び四男を携へて幌泉村より某帆船に便乘して其生國陸奥に向ひ歸途に就きしも、船と共に其行衞不明なりと云ふ。 同年九月父八百吉は氏を庶野村の知人長岡清太郎方の使丁とし、次子を日高國浦河に留め、單身札幌に來りて、其後此地「レストラント、ホテル」豐平館の帳場頭となる。 斯くて氏は明治七年九月より十一年三月まで長岡方に在りて雜役及び郵便配達に從事し、同三月父の命により、浦河なる幼弟を伴ひて札幌に來る。同十六年札幌農學校小使に採用せられ、同二十二年雇に昇進し、同三十一年七月迄其職に在りき。



氏幼にして勞役の人となり。 學事に親むの機會なかりしと雖も、性極めて學を好み、其日高にありて、郵便配達に從事するや、寸暇あれば書を繙き一片の古新聞紙と雖も空しく捨ることなかりしとぞ。 特に其の札幌農學校に於ける十有六年は氏の最も刻苦精勵せる奮鬪時代にして、その小使たりし時より業務の餘暇內外諸教師並に學生に就きて漢、英、理化、博物等の諸學科を學び、又傍ら夜學校に通學する等孜々として學習に餘念なかりき。 多年札幌農學校助教授たりし山崎益氏語りて曰く、余一夜宿直室にあるや、德淵氏當時の最新譯書たるゼボン氏

論理學(添田壽一氏譯)を携へ來りて其講說を求めしことありと。然れども德淵氏の最も愛好せるは植物學にして、明治二十三年教授宮部金吾氏の助手として、植物學教室詰を命ぜらるるや、勇躍欣喜益々奮勵する所あり、その進境頗る見るべきものありき。

宮部教授の助手としての氏の任務は主として腊葉標本整理なりき。これを以て氏は日々夥多の植物に親しみ、種名檢索法等を練習せしのみならず、隨時野外に採集を試み、又屢々同教授の採集旅行に從ふ等精勵の功空しからず、本道植物に精通するを得たり、而も氏はこれを以て足れりとせず、更らに進んで植物生理學及組織學、動物學人體生理學等を修め、又佛語及獨語を學ぶ等其勤勉努力常人の及ぶ所にあらざりき。宜べなり、その明治三十一年五月中等博物科植物學、動物學、生理學、教員檢定試驗に應ずるや、植物學科及び生理學科に合格し、殊に植物學に於ては其成績優秀なりしことや。斯くて氏は宮部教授の慫慂に從ひ、同年七月岐阜縣尋常中學校の聘に應し、越えて三十二年四月愛知縣第一中學校に、三十五年更らに秋田縣立農學校に轉じ、同年奏任教諭に昇任し三十八年八月島根縣立農林學校に轉じ、同年十月從七位に叙せられ、爾來同校に勤續し四十五年五月正七位に昇叙せられたり。

氏の篤學は札幌を去りし後と雖も渝ることなく、明治三十三年には三崎臨海實驗場に於て動物學を實習し、三十七年には文部省開催の實業學科講習會に出席し三十七年には夥多の標本を携へて札幌に來り其種名を調査せしが如き其他各任地に於ける博物學の進歩發達に盡力し且つ語學の涵養に意を用ひし等到るところその篤學なると職務に忠實なるとを以て同僚間に推稱せられ、島根縣立農林學校に於ては明治四十一年以來舍監を兼ね又一時校長代理たりし等上下の信用頗る厚かりしが、大正元年八月同校卒業生會に於て講演中卒倒して後頭部を擊ちし結果腦に異狀を呈し、翌二年一月以來京都に於て療養を加へしも其效なく、同年五月二十二日遂に逝けり。享年四十九。遺骸は同五月二十五日佛式を以て近江國甲賀郡三雲村(令室の鄉里)に葬らる。

氏在札中妻帶したりしが故ありて離緣し其後近江國三雲村某氏女かつ子を娶り一男二女を擧ぐ。未亡人三兒と共に今その鄉里にあり。

氏は明治二十七及八年フランシエー (A. Franchet) 氏著**ネコノメサウ**屬檢索表を「植物學雜誌」に譯載し猶これと同時に「蕙林」(札幌農學校文武會發行) 誌上に寄稿する所あり、次て又「植物學雜誌」上に於て本道産**ヤナギ**の種類に就いて再三記述せる所ありき。氏は又此頃より**エゾシロネ**に就きて綿密なる研究を試み、夙に本會に於て其結果を發表したりしが島根縣立農林學校在職中これを大成し「**エゾシロネ**の學名及び兩形に就て」と題し「隱岐島植物分布論」と共に宮部理學博士就職二十五年祝賀記念「植物學襍說」にこれを掲げ大に異彩を放てり。この「隱岐島植物分布論」は主として氏自ら踏査採集せる約六百種の植物に基づきて同島「フロラ」の特徴を論じ、附するに同島植物目錄を以てせる一大論文にして實に氏の最も熱血をそゝぎし所なり。

今東北帝國大學農科大學腊葉標本室に藏せらるる標本にして氏の採集に係るもの甚だ多し。殊に本道産**ヤナギ**類標本の如き其主要なるものなり。

本邦産植物にして氏の名を種名とせるものは次の如し。

Fissidens Tokubuchii Brotherus (膽振國室蘭にて採集)。

Hypnum (Bryonia) Tokubuchii Broth. (日高様似山道にて採集)。

Viola Tokubuchii Makino (フヂスミレ、アフヒスミレ)。

明治二十七年米國樹木學者サーゼント (C. S. Sargent) 氏の來道するや、宮部教授偶々病床にありしを以て德淵氏代りて案內の任に當り、札幌附近を始めとし遠く渡島方面並に青森縣八甲田山まで其行を共にし。多大の滿足を與へたり。サーゼント氏著 Forest Flora of Japan の口繪は札幌なる藻岩山麓に於ける**カツラ**の巨木を撮影せるものにして、氏は採集函を肩にして樹下に立てり。實に好箇の記念と謂ふべし。

德淵氏、宮部博士就職二十五年祝賀記念植物學襍說に論文二編を寄せしは前に述べたるが如し。これを以て本書の印刷成るや、余等は一日も早くこれを氏の許に致して喜を共にせんと欲し急遽一本を郵送せしに何ぞ圖らん氏は此時既に重症に陷りしかば、遂にその秩序ある感想を窺ひ知るを得ざらんとは。これ實に余等の一大恨事たり。然れども氏の該書を手にするや愛玩措かず、永眠の日に

至る迄殆んど手より離さゞりしと云へば、此書は確かに同氏最大の慰藉たりしが如し。余等此事を傳へ聞きて聊か自ら慰めずんばあらざるなり。

嗚呼氏や勤勉努力を以て終始一貫し、その一生は實に一部の立志傳たり。その年猶壯にして逝ける、眞に惜むべし。而も其死の悲愴たる、人をして同情に堪へざらしむ。

大正三年二月十五日　　高橋良直識

本文の始めに記したる、故德淵氏幼時の事跡は日高國幌泉郡庶野村なる長岡清次郎氏の答書により、其後の經歷は主として札幌農學校及び島根縣農林學校に提出しありし故人の履歷書と故人の恩師にして併せて筆者の恩師たる、宮部博士の談話とによれり。長岡氏は德淵一家の函館にありし頃より同家と昵懇の間なりし人にして、故人の幼時の波瀾に富める小說的事跡を詳にするを得たるは一に同氏の賜なり謹みて茲に謝意を表す。

故人の出生地は、その札幌農學校に提出ありし履歷書には函館とあるに拘らず、島根縣農林學校に提出しありし履歷書は肥前國養父郡とあるを見れば、故人自身も此點に關し疑惑を懷きしに似たり。然れども筆者は長岡氏の答書の正確なるを信じ函館を以て故人の出生地となせり。遺族の疑問あらんことを慮り茲に記事の出所を明にす。

故德淵氏論文目錄

1. 附子とフクベラの差異。

   北海之殖產第二輯第二十五號（明治二十五年七月）

2. ネコノメサウ屬檢索表。

   植物學雜誌｛第八十八號（明治二十七年六月）
   　　　　｛第百三號（明治二十八年九月）

3. 北海道產董菜屬植物識別表。

憲林第十二號（明治二十七年七月）

4. アヤメ、カキツバタ、ヒアフギアヤメの種別。

同上第十七號（明治二十八年九月）

5. 北海道自生楊柳屬種類に就て。

植物學雜誌第百十號（明治二十九年四月）

6. On Some Species of Salix. I. (With 1. Pl.) (和文添付)

同上第百十六號（明治二十九年十月）

7. 博物學の應用。

愛知縣第一中學校學友會雜誌第五十號（明治三十三年六月）

8. 本校中庭の老大栗樹の顚倒に就きて。

同上第五十一號（明治三十三年十一月）

9. 軟體動物の祖先形に就きて。

同上第五十二號（明治三十四年七月）

10. 珊瑚礁の話。

同上第五十三號（明治三十四年十二月）

11. エゾシロネの學名及兩形に就て。

宮部理學博士就職二十五年祝賀記念

植物學襍說（大正元年十二月、東京、六盟館發行）

12. 隱岐島植物分布論。

同上。